

# 歴史館だより



保春院尊像（仙台市・保春院）

- 伊達政宗の母義姫（保春院）の最晩年（前編）
- 山形城と私
- 新・最上義光連歌の世界①
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No.14
- 山形・山寺・最上義光（位牌）の御霊屋について（前編）

No.31  
2024年3月発行



最上義光歴史館

# 伊達政宗の母義姫(保春院)の最晩年(前編)

佐藤 憲一

はじめに

伊達政宗(一五六七〜一六三六)の母義姫(一五四八〜一六二三)の最晩年はどのようなものであったか。元和八年(一六二二)九月山形から仙台の政宗のもとに帰り、翌年七月に亡くなるまでの約一年間の暮らしぶりを、新しい資料などを紹介しながら探ってみたい。

ところで義姫の名前については、手紙や日記など当時の一次資料で確認できない。伊達家の居城米沢城の東館<sup>(1)</sup>に住んでいたためであろうか、「お東」「お東様」と呼ばれていたようである。元禄十六年(一七〇三)に編纂された伊達家の正史「貞山公治家記録」(仙台市博物館蔵)には政宗の母として義姫の名が出てくる。ここでは「貞山公治家記録」(以下、「治家記録」と略す)に従って義姫として話を進めていきたい。なお、保春院は諡(おくりな)で

ある。

義姫の願い

文禄三年(一五九四)十一月四日夜政宗の居城岩出山(宮城県大崎市)から山形へ出奔した義姫が二十八年振り仙台の政宗のもとに帰る契機となったのは、元和八年八月の実家最上家の改易だった。内紛により山形藩五十七万石が幕府によって城地没収とされたのである。三代藩主最上家信(後の義俊。当時十七歳)の時である。家信は義姫の兄義光(山形藩初代藩主。一五四六〜一六一四)の孫にあたる。

改易によって行き場を失った義姫を政宗は幕府の許可を得て仙台に引き取る。それは母義姫の希望でもあった。元和八年九月六日義姫が政宗の家臣片倉小十郎重綱と山岡志摩守重長に宛てた手紙<sup>(2)</sup>では、「せひ<sup>(是非)</sup>かちはたしに<sup>(徒)</sup>ても、政宗のくに<sup>(國)</sup>のはし<sup>(編)</sup>へころひ入候

はんと、心かけ申候(中略)としの<sup>(上)</sup>

うへと申三年ほとわつらひ候て、<sup>(立居)</sup>たちるさへふちゆうにて候(中略)内々<sup>(果)</sup>よしあきはて候て此かたハ、一入<sup>(義光)</sup>さん<sup>(散々)</sup>のていにており申候」と苦衷を訴えている。慶長十九年(一六一四)一月兄義光が亡くなった後は苦しい生活が続ぎ、年の上とは言いながら三年前からは病のため体調を崩し、立ち居さえもままならない状況であったことが分かる。徒歩、裸足でも政宗の国の端に転び入りたい、という言葉に切実な思いがこもる。

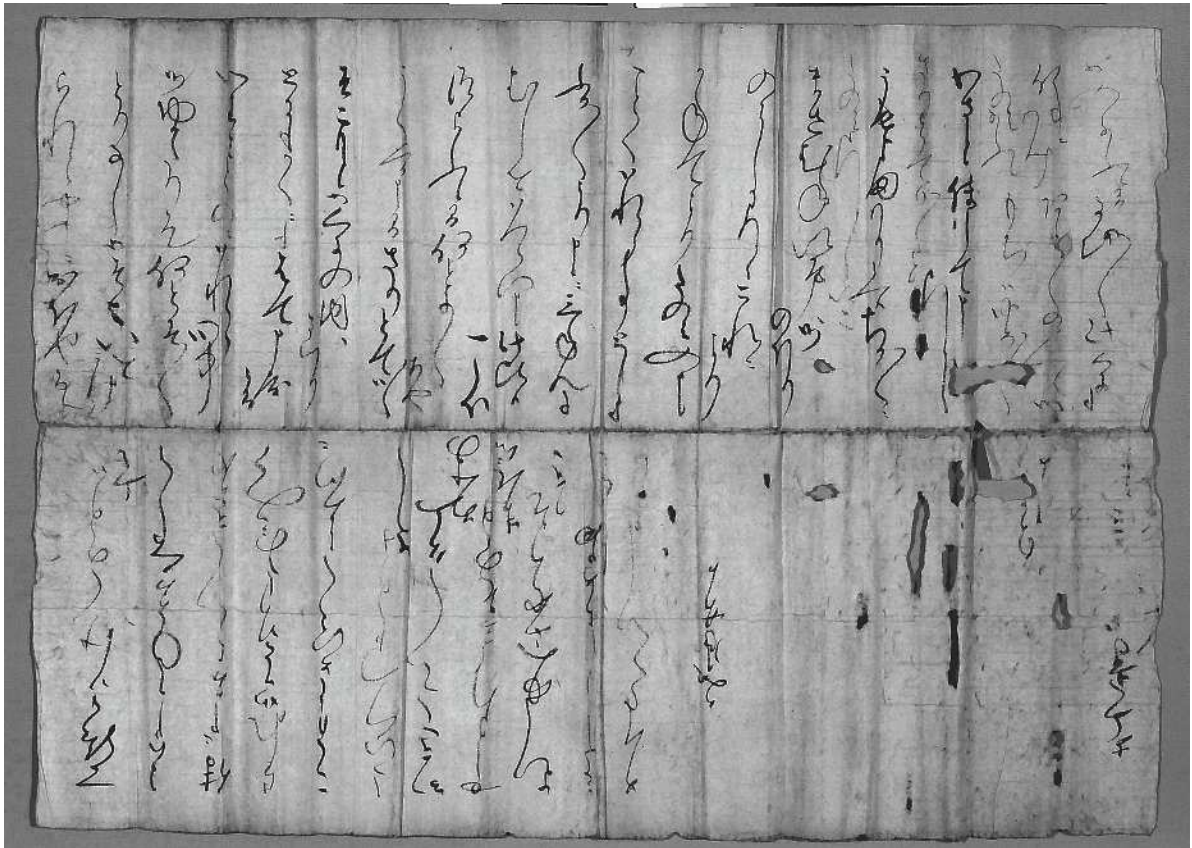
義姫が政宗のもとに帰りたいと願ったのは、実は最上家改易以前からである。前年の七月二十日と推定される仙台的資福寺(仙台市青葉区北山にある伊達家の菩提寺)に宛てた手紙<sup>(3)</sup>でも、政宗の国へ参り、そこで死にたいと述べている。従来あまり注目されることになかった手紙なので、全文を掲載す

る(写真)。

差出人の「小宰相」は義姫の侍女。高齢のため侍女に代筆させたのだろう。乱筆・乱文を詫びているが、どうして、教養を感じさせる見事な筆跡の仮名消息である。文中の「石見殿」は政宗の側近茂庭石見守綱元である。『伊達家文書』では、この手紙を資福寺の虎哉和尚(一五三〇〜一六一一)に宛てたものとしている。しかし、虎哉が資福寺の住職を務めるのは天正十三年(一五八五)十二月までであり、これは当然でない。前述の義姫が片倉・山岡に宛てた手紙と内容が重複することから、元和七年のものと推定される。ちなみにこの年、政宗は八月二十日に仙台を発ち同二十八日に江戸に着いており(「治家記録」、手紙の内容とも一致する。元和七年とすれば資福寺の住職は虎哉の法嗣、祝峰和尚か。

「かねてより頼み入り申し候」とく」とあるように、これ以前から義姫は政宗のもとへ帰りたいとの希望を政宗側に伝えていたことが分る。それは政宗本人ではなく、ここに見られるように、伊達家ゆかりの寺である資福寺や政宗

四ページ二段目に続く



保春院（伊達輝宗夫人・最上氏）消息 資福寺宛（元和7年カ）文月20日 折紙 縦35.7cm 横50.1cm 仙台市博物館所蔵

〔解説〕

なを（猶々）、此（國）にも、  
 あと（後々）の人の心  
 もちハ、ゆめ（持）く  
 御入なふ候間、  
 何事二つけ、  
 たのミなふ候、  
 さりとてハくと、  
（頼）たのミまいらせ候、以上、  
（態）わさと使して申まいらせ候、  
（承）うけたまハリ候へハ、ちか（近々）く二  
（政宗）まさむね江戸へ御のほり  
 のよしにて候、これ二より、  
（頼）かねてよりのミ入申候  
 ことく、ハれら事としも  
（深々）ふか（寄）くより申候二、三ねんに  
（患）むしをハつらい申候、此頃ハ一しほ  
（患）つよふ候間、何ともくあや（危）  
 ふく思ひ申候間、さりとてハくと、  
（國）そこもと御くにの内へまいり、  
（米）とにもかく二も、はて申度候間、  
（石見殿）いわミとの二、ハれら心中  
（語）御物かたり候て、何とそく  
（取成）とりなし、御そこいをうけ  
（底意）られ候やう二、おほせ候て（折紙見返し）

可給候、ハけ（訳々）の事ハ、ふミ（文）  
 にハ申かね候間、くハしく  
 使二申候間、よく（聞）きかせ  
 られ、御ことハりたのミ入候、  
（迷惑）こ、もとめいわく、よろつ二  
（退屈）たいくつ申事もさし  
 おき、た、く（今日明日）けふあすの  
 やうにて候間、その事まで二候、  
（虫）むしゆへ、ふせり候て、かき  
（乱）ミたし候、よめ申ましく候、  
 めてたくく、かしく、

（元和七年カ）

文月廿日

しふく寺へ

人々

こざいしやう

もかミより

〔訳〕

わざと使者をして申し上げます。お聞きしたところ、近々政宗が江戸へお上りとのこと、これを機に兼ねてお頼み申しておりましたが、私も大分年寄りとなり、三年程虫を患って（虫氣<sup>1</sup> 痲）おります。此の頃は一段と酷くなり、命さへ危うく感じております。是非とも、そちらの国の内へ参り、ともかくにも果てたいと願っておりますので、石見殿に私の心中をお伝えいただき、何卒（政宗に）私の心の奥をご理解いただけるよう取り成しお願い申し上げます。詳しいことは手紙には書けませんので使者に伝えてあります。よくお聞きになられお取次ぎをお頼みします。こちらでの難儀や退屈はさて置き、唯々今日か明日かとはかり毎日を送っております。虫気で臥せているため、乱筆・乱文でお読みになりにくいかと存じます。めでたく、かしく。

猶々、この国（山形藩）も後々の人の気持ちは到底分かりません。何事につけ頼りなく感じております。（そのような訳で）どうしても、お頼み申し上げる次第です。以上。

側近の茂庭綱元を通して行われていたと考えられる。綱元は元和四年夏、政宗の五男宗綱の菩提を弔うため高野山に入り、入道して了庵高岬と号していた。同六年六月頃仙台に戻り、引き続き側近として政宗を補佐した。当時は「茂庭石見入道<sup>5</sup>」と呼ばれていたようである。

綱元は天正十八年四月の「母による政宗毒殺未遂事件」と「政宗による弟小次郎殺害事件」の直後に、政宗から内密の手紙を受け取り、事件の詳しい経緯を知らされた人物である。これについては既に『歴史館だより』三十号で紹介したところである。綱元は政宗から二つの「事件」が、実際は政宗と母による狂言であることを知らされていた可能性がある。このため山形へ出奔した義姫との連絡は綱元に任されていたのだろう。

袖追書（追伸）にある「山形藩も後々の人の気持ちは到底分かりません。何事につけ頼りなく感じております」とは、兄義光亡き後の最上家内部の対立、内紛への不安だろう。義光の跡を継いだ二代藩主最上家親は元和三年六月、三十六歳で急死（変死）。三代目となっ

た家信（義俊）は十三歳だった。

仙台へ帰る

義姫がお付きの者たちと山形を發つたのは九月十一日<sup>6</sup>である。仙台からは義姫一行を迎えるため大勢の人数が派遣され、道中で使用する食糧や物資も送られた。当初は十日に發つ予定であったが、山形城請取のため幕府から派遣された上使本多正純と永井直勝に挨拶するため一日遅れたのである<sup>7</sup>。

一行は笹谷峠を越え砂金（宮城県川崎町）を通り、秋保（仙台市太白区）、愛子（仙台市青葉区）を経て根白石（仙台市泉区）の御飯屋（満興寺境内）に入った。この御飯屋は政宗が近くを流れる七北田川へ川狩（鮎漁）に訪れたときの宿泊所（別邸）であった。義姫は約一カ月ここに滞在した後、十月初め頃に仙台北下の屋敷へ移る。ただ、その場所は不明である。想定されるのは仙台北の北、後の二の丸の辺りか。当時この場所には政宗の子どもたちの屋敷があった。元和六年に江戸から移った長女五郎八姫<sup>いろは</sup>の屋敷（西屋敷）もあつた。いづれ城の近辺であつたらう。義姫と政宗が二十八年振りに再会す

るのは、政宗が江戸から仙台に帰る十月二十四日以降である。

〔注〕

〔1〕米沢城内には「西館」も在り、家督相続以前の政宗は「伊達西殿」〔『大日本古文書 伊達家文書』三一七号。以下「伊達家文書」と略す〕と呼ばれていた。

〔2〕「片倉代々記」〔『白石市史 史料編（上）』所収。原本は仙台市博物館蔵〕。なお「治家記録」にも採録されている。

〔3〕「伊達家文書」三二六九号。

〔4〕虎哉和尚「年譜」「行状」〔『訓注 虎哉和尚語録』所収。覚範寺、平成二十二年刊〕による。

〔5〕「仙台市史 伊達政宗文書」二〇三四号、二二三四号など。

〔6〕「梅津政景日記」〔『大日本史料 十一編之二十一』〕によると九月十一日「政宗様之御袋、今七つ時山形御立なされ候」とある。

〔7〕（元和八年）九月十日付茂庭了庵宛小宰相消息（登米市歴史博物館所蔵「佐沼巨理家文書」）による。

（伊達政宗研究家／元仙台市博物館館長）

# 山形城と私

伊藤 秀美

私は昭和三十八年に山形市城北町一丁目に生まれた。すぐ隣は天理教の教会で、朝はお勤めの音だろうか、鐘がチンチン太鼓がドンドコ鳴っていたのをうつつすらと覚えている。

ちなみに、霞城公園北門にほど近い天理教の教会は今でも同じ場所に建っている。私の生家も人手に渡ってし



現在も健在の当時からある遊具

まったが老いさらばえた姿そのままに残っている。どちらも子供の頃は大きく見えたものが今は何ともちんまりとして、こんなものだったんだなアと、たまに通るたびに思う。

霞城公園までは幼い子供の脚でもほんのちよつとの距離だったので、私は毎日のように母や祖母に連れられて公園で過ごした。北門前の商店でアイスクリームなどを買ってもらい土手の桜の切り株に座ったり公園の遊具で遊ばせてもらったものだった。

昔は子供の数も多かったので、滑り台などの遊具は子供でいっぱいだったし、公園内にあった「児童文化センター」に行けば毎日誰かしらと顔を合わせ、卓球をしたり「トムとジェリー」を見たりしていたのだった。

当時の霞城公園の西堀は水が無い空堀だった。北門の西側から南門の西側の堀は湿った地面にススキが生えていた。小学校の五、六年生頃かしら、我々悪ガキ連中は空堀に誰かが懸けた梯子を降りて公園に近道をして行き、公園

の広場に作ったTSスタジアム(田中君と佐藤君がいたからそういう命名になった)で野球を楽しんだ。スタジアムと言っても、ホームベースと一塁三塁に目印の石が置いてあるだけの三角ベースだったけれど。

小学校四年生の時に城西町に引っ越すまで、霞城公園は常に私の生活の一部だった。家の前には御殿堰が流れていて、当時は暗渠になっていなかった。水路をずっと辿って行くことができた。今にして思えば危なっかしい話だが、この堰の上流下流を行ける所まで行ってみようと心に決めて、ひよろひよろと一人自転車よく出かけたものだった(実家が自営業で忙しかったのと兄弟も多かったのとで、親は子供をある程度放つたらかしだったし、それは我が家に限らず世の中そうだったような気がする)。

私は今でも山形五堰の流れを辿って小白川から寺町、七日町あたりを(時に民家の敷地を覗き込みながら)散策するのが大好きなのだけれど、この性向は城北町で過ごした子供の頃に作られたものに違いないと思っている。

さて、山形第二中学校は現在の霞城公民館の場所にあったが、ここは山形城三の丸の西端、扇状地の扇端に位置していた(当時はそんなことあまり考えなかったけれど)。

校地の南側、火の見櫓の隣に「ドッ

コン水」という湧き水がその名の通り勢い良く湧いていた。中学には「五垂の泉」という池があったけれど、私はドッコン水の流れを眺め水音をいい気持ちで聞いたことの方をよく覚えている。

さて、還暦を過ぎた今でも城西町に住んでいる訳だけれど、いわゆる「駅西」の変貌ぶりはいま昔の姿を思い出せない程だ。だけれど、例えば第三中学校西側や第七小学校北側地形に三の丸の跡を感じることができると、今ははつきりわからなくなってしまうけれど旅籠町のカギ型の道路に城下町の作りに思いを馳せることができる。

いわゆる鉄道ファンには乗り鉄撮り鉄食べ鉄呑み鉄と多種多様あるようだが、私は何を隠そう「廃鉄」である。廃止された線路や線路跡にいたく郷愁を感じる類で何となれば線路が無くても構わない派なのだ。

山形城三の丸跡にも廃鉄と同類の感傷を持つのはそこに時間経過が生む想いがあるからだろうと思う。

最近、山形五堰の復活の試みがなされてきているのは喜ばしい。時間がかかることと思うけれども、城下町山形の貴重な財産である山形五堰を、ぜひ市民の身近な風景に復活させたいものだと思っている。

(株式会社YCC情報システム

代表取締役社長)

# 新・最上義光連歌の世界①

生田 慶穂

1 梅咲て句ひ外なる四方よももなし

2 いくへ霞のかこふかき内

3 春深きかげの山畑道みえて

文禄二年二月十二日賦何人百韻

義光  
守棟  
紹巴

天正二十(文禄元・一五九二)年、義光は秀吉の朝鮮出兵に動員され、諸将とともに肥前名護屋城(現佐賀県唐津市)に向かった。右は、名護屋在陣のまま翠春を迎えた義光が、家老氏家守棟らと詠んだ連歌の冒頭である。『最上義光連歌集』全三集に収められた三十余巻の中でもつとも年次が古く、義光と紹巴の最初の接点として注目される。

ところが、実はこのとき、義光と紹巴は直接会っていない。どういうことかという点、まず名護屋で義光と守棟が発句と脇句を詠み、それを義光家臣江口光清が京に届け、第三以降は紹巴らが京で満尾したのである。かつて故名子喜久雄氏が紹巴の九州下向を唱えられたが(『人文論究』六九)、のち紹巴の伝記研究が進んで在京が明らかとなり(西角倉一氏『連歌師紹巴』)、故片桐繁雄氏が光清使者説を立てられるに至った(『最上義光の風景』)。

つまり、秀吉の命令で名護屋を離れられない義光

は、連歌に言わば「リモート参加」した。これは単に文芸好きが高じてのことではない。義光には戦勝祈願という確固たる目的があった。前掲書で片桐氏は紹巴に求められて義光が発句を送ったと推測されたが、そうではなく、義光の方から紹巴に連歌興行を求めたと考えられるのである。

戦勝祈願として連歌を寺社に奉納する例は多い。例えば、天正六(一五七八)年五月、秀吉は毛利攻めの前に『羽柴千句』を行っているが、当時秀吉は播磨におり、紹巴に千句を依頼しただけで句も代作の可能性が高いと指摘されている(『連歌大観第四巻』廣木一人氏解題)。このように戦陣から在京の連歌師に指示して連歌を興行させた先例があるのである(ただし義光の場合、句は自作であろう)。

それでは、戦勝祈願の連歌として冒頭の三句を読み解いてみよう。

まず、義光の発句における「梅」の「句ひ」は秀

吉の威光を象徴する。「外なる四方もなし」はそれが至らない場所はないの意。この「四方」の使い方、文禄元年の『出陣万句』で吉川広家と同じく、戦勝祈願として詠んだ「日本のひかりや四方の今日の春」に通じる。守棟の脇句は、巨大な軍勢が「霞」のように名護屋城の「かき内」を何重にも取り囲んでいると詠む。そして紹巴の第三は、春霞の陰に山畑が見えると治世を寿ぐ。表面的にはどれも春の叙景句だが、予祝をこめた典型的な戦勝祈願の詠みぶりである。

文禄二年春、秀吉の渡海計画が進むさ中、義光はこの連歌を紹巴に依頼したのである。結局、秀吉の渡海は実現せず、義光も渡海を免れたが、甥の伊達政宗は三月に渡海しており、義光もその覚悟を決めていたはずだ。武将の心意気あふれる発句といえよう。

(山形大学准教授)

# 義光会だより

No.14  
2024年3月



題字 齋藤蕉石

長く続いた新型コロナ感染症が五類移行となり、ようやく義光会にも本来の活動が戻ってきました。県内外の来館者、また、外国の方の来館も徐々に増加しており、喜ばしく思っております。

## 最上義光を理解してもらうために 〜義光会サポーターの活動〜

### (1) 館内案内を通じて

昨年のNHK大河ドラマ『どうする家康』の放映のおかげで、北の関ヶ原も、多くの番組に取り上げられ、うれしく思っております。しかしながら、そのほとんどが、伊達政宗と上杉景勝・直江兼続の間で繰り広げられた抗争で、最上義光の奮戦は付け足し程度。残念に思わずにはいられませんでした。

「最上義光歴史館?どこにあるの?」「最上義光って、陰険な人なのでは?」「良い政治を行っていないから、つぶされたのでしょうか?」

この山形市でも、最上義光について、こんな言葉が返ってくることが多いのが現状です。

最上家の石高は、関ヶ原合戦前の二十四万石から五十七万石へ、天下の徳川家康が最上義光の功績を評価してくれたというのに、です。

何しろ最上義光は知名度が低い。わざわざ歴史館に足を運ばれる方々なので、歴史には興味を持っている方たちに違いないと思うのですが、名前は聞いたことがあるけれど...という方もいらっしやいます。県外からのお客様ならなおのこと。サポーターが館内を説明しながら回らせていただくと、最後には、最上義光の北の関ヶ原で果たした功績や業績に触れ、義光に対する認識を新たにされ、帰って行かれます。

### (2) ヨシアキ☆すく〜る (こども講座)、館内見学を通じて

山形市の小学校では、四年生で最上義光の学習が取り入れられているため、多くの小学校が歴史館見学や『ヨシアキ☆すく〜る』という出前授業を組み入れてくださっています。

まだ歴史の学習をしていない四年生時代区分や「石高」などの歴史用語も知らない児童にとつて、義光の戦いや

業績についての私たちの説明はとても難しいだろうと思われれます。それでも、熱心に耳を傾けてくれ、見学や出前授業が終わると、児童たちは一様に目をキラキラさせて満足そうな笑顔を見せてくれます。未来の山形市を背負っていくこれらの児童たちの心に最上義光はきっと好感をもって印象付けられたはず。地味ではあるけれど、こうした一つひとつのサポーターの活動が義光の知名度や好感度アップにつながっていくのではと思っております。



(3) 先生方の研修のお手伝いを通じて  
一昨年は市小教研社会科部会の先生方が来館されました。私たちサポーターが館内案内やこども講座についての説明をさせていただき、その後で、

先生方に授業プラン作りもいただきました。昨年、個人で来館して研修された先生、また、校内研修にお呼びいただいた学校もありました。

より良い授業にするために、先生方が熱心に研修される姿には本音が下がる思いでした。研修後のアンケートでは、参加されたすべての先生が今後の指導に役立つと回答してくださいました。また、山形になじみの少ない先生方からは、「これで安心して授業ができそうです」などの声も聞かれました。

こうした先生方と学習を進めることができる児童たち。やがては、山形市民の最上義光についての深い理解につながっていくのではと思っております。

昨年は、米沢の「伝国の杜サポーター」の方々との交流の機会をいただきました。それぞれの地域を盛り上げるために、なお一層活動に力を入れていかなければという意識を持つことができました。

その他にも、来館者に対するより質の高い説明を目指して、歴史専門家をお招きしての研修会や現地研修など、様々な研修の機会をいただいております。インプットだけでなく、アウトプットにつながることに大いなる喜びとやりがいを感じております。(佐藤)

〈特別寄稿〉

# 山形・山寺・最上義光(位牌)の御霊屋について(前編)

伊藤 藤夫

宝珠山立石寺は、慈覚大師円仁が清和天皇の勅許を得て開いたという名高い霊場寺院で、立石寺あるいは単に「山寺」とも呼ばれている。

昭和七年(一九三二)十二月、国名勝史跡指定を受けた。貞観二年(八六〇)慈覚大師創建の古刹であり、一相坊円海(いっそうぼうえんかい)が再興した。

延暦寺不滅の法灯は、織田信長の焼き討ちの後立石寺から法灯を受け継いだ。東北の比叡山として有名であり、凝灰岩の岩盤に建つ釈迦堂の開山堂、根本中堂などが建ち並ぶ、奥深く静かな景勝地である。

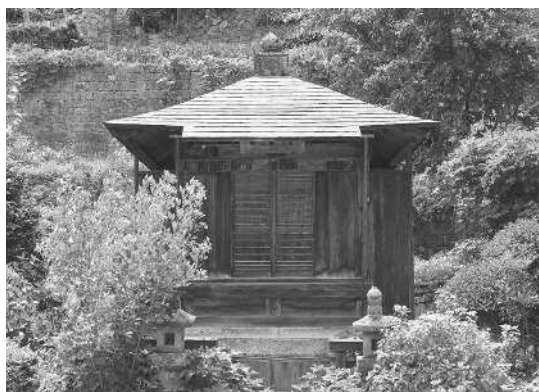
その宝珠山立石寺の一角に、最上義光の御霊屋(位牌堂)がある。建設時代には極楽院西側にあったことが、『山寺状口絵』(一七二六)により確認できる。その後移転が数回繰り返され、現在は中性院向いに鎮座していることが『羽州山寺立石寺宝珠山略絵図』(一八六一)でも確認できる。



山形藩五十七万石の初代藩主となった最上義光の御霊屋であり、これまでに建物やその内部に納められている位牌等について調査されてきたが、「建築史学」的な調査は行われておらず、建築年代や建築後の変遷など不明な点が多かった。平成二十五年(二〇一三)に山形霞城郷土史研究会は、建築史学の観点から宝珠山立石寺中性院住職の立会いのもと、山形大学永井康雄教授

(建築史学) 他関係者に依頼し実測調査と放射性炭素年代測定のためサンプルを採取した。

建築後の経緯など考察を依頼した結果、建物の概要としては御霊屋建物の宝形造内部は、床板張部分に建築後間もなく一部取り替えが行なわれていることが一見して分かる。その他は古い材が残っている。(後編に続く)



最上義光の御霊屋

〈参考文献〉

一、日本建築学会東北支部研究報告集

計画系第七八号

(山形霞城郷土史研究会会長、最上義光歴史館サポータークラブ「義光会」会員、位牌が納められている忠臣の子孫)

## 表紙の写真

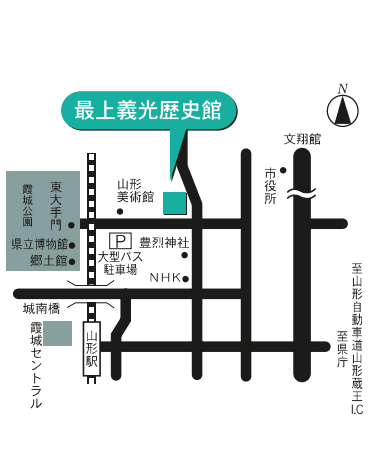
木彫彩色 保春院尊像(仙台市・保春院)

最上義光の妹で伊達政宗の生母である保春院(お東の方、一五八四〜一六三三)の四〇〇年忌(没後三三九年)にあたり、菩提寺・保春院(仙台市若林区)の三浦真人住職が木製の尊像を制作する「保春院さまプロジェクト」を立ち上げました。没後四〇〇年にあたる令和五年に尊像が完成し、十月八日に開眼法要が行われて一般にお披露目されました。当館では、三浦住職のご好意で、出身地である山形で、令和三年九月二十七日に当館を会場にして「保春院尊像入れ式」山形会場が開催され(歴史館よりNo.10)の表紙写真、「歴史館」よりNo.20には三浦住職から特別にご寄稿いただきました。表紙の写真は完成した保春院様の御尊像です。「歴史館」よりNo.209「表紙の完成前の写真と見比べてみてください」。

## ご利用について

開館時間 午前9時から午後4時30分  
入館料 無料  
休館日 月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日)  
12月29日から1月3日  
交通 J R山形駅より徒歩約15分  
大手町バス停留所より徒歩1分

## 来館案内図



令和6年3月発行  
編集発行 公益財団法人山形市文化振興事業団  
最上義光歴史館  
〒990-1004  
山形市大手町1-1-53  
☎023-162517101  
023-162517102  
http://mogamiyoshaki.jp  
印刷 株式会社大風印刷